

私のラッキーだった転勤・転宅

野口幹夫

数えてみれば結婚してから、4回の転勤転職、4回の転宅を経験した。どれもそれぞれが懐かしい思い出を伴い、そして何よりもそれらは人生の節目として自分を大きく成長させてくれた出来事であった。

中でも一番印象深いのは初めての転勤だった。33歳の3月東芝の川崎の本社工場から、姫路の太子分工場へ転勤を命じられた時だ。カラブラウン管の量産工場を立ち上げ、育て上げる任務を与えられた。8年間で師であった RCA を技・量ともに追い抜く大工場にできたし、この間お客であった世界のテレビ製造会社を訪ねまわった。



社宅は、広々とした工場に隣接した住居で庭付き2階建てだった。

ミッションも魅力的であったが、自分の家族のためにも都合がよかった。大阪の父母を引き取ることができ、この地で見送ることができた。幼児だった二人の子供たちも田舎ののびのびした空気の中で成長できた。幼稚園から小学校時代を送ることができた。

3度目の転勤で東京に戻ったが、それに連動して4度目の転宅をした。この選定には妻が頑張ってくれた。神奈川県のあるところを探してみ回り、今の茅ヶ崎海岸の近くに新宅を作ることができた。ここは縄文時代にさかのぼっても、この土地にはかつて人類が住んだことの

ない地だった。そして今度は妻の両親を引き取り、一緒に老後の世話をし、そして見送ることまでできた。

考えてみれば両方の親を順次引き取り見送るといふ孝行ができたわけで、現在のような高齢者制度の無い時代だったのでだが、不自由なく老境を過ごしてもらえらる条件で、順番良くお世話できた幸運も「転勤・転居」のおかげだと思っている。そして今は自分たちの健康のために願ってもない場所にいる。

5度目の転宅は、2~3年先、高齢者住宅にお世話になるときだ。そのための調査は始めているが、ゆっくりでいいのだ。

そして6度目は宇宙のかなたに飛翔するときだ。それは10年先にしたい。

